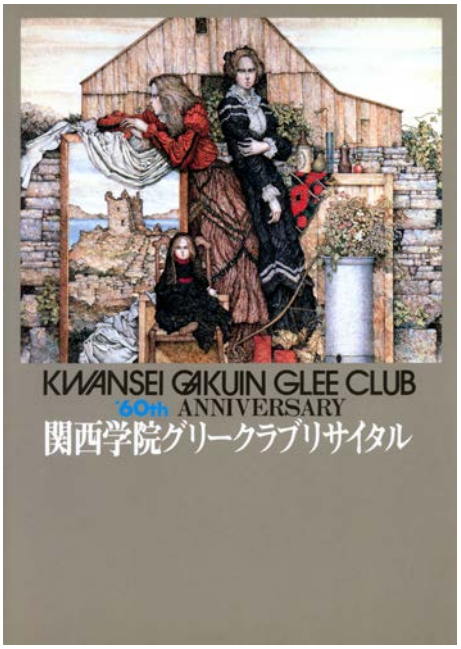
60th RECITAL 【1992 年（平成 4 年） 1 月 25/26 日】 神戸文化ホール/フェスティバル



5th STAGE

男声合唱組曲

雪明りの路

春を待つ
梅ちゃん
月夜を歩く
白い障子
夜まわり
雪　夜

作詩 伊藤　整
作曲 多田　武彦
指揮 北村　協一

男声合唱組曲 **雪明りの路**

作詩者 伊藤　整

伊藤整は明治36(1905)年に、北海道松前に生まれ、忍路郡塩谷村で育った。詩人としてスタートした彼の文筆活動は萩原朔太郎らに影響を受け、大正15(1926)年に処女詩集「雪明りの路」を自費出版した。この「雪明りの路」に収められた詩は、彼が16歳から22歳の頃に書かれたもので、近代象徴派とアイルランド的情緒との融和を感じさせる自由律の叙情詩であった。ついで新心理主義といわれる精神分析的手法による作品をいくつか発表し、幻想的な小説「幽鬼の街」で認められた。以来、心理的手法と自然主義の流れに立つ私小説的手法との融合をはかり、特に戦時下の時代にあって、知識人の在り方、思想に焦点を合わせて、それを追求した。その後、評論家、あるいはD. Hローレンスの作品の翻訳等の道にすすみ、チャタレー事件の被告として、執拗に文学者の立場を主張し、その間の体験から、すぐれた小説・評論を多く手がけて、昭和44(1969)年に、65歳で他界した。

組曲「雪明りの路」の思い出　多田武彦

北村先生がアンコールで、曲目を告げないまま棒を振り始め、メンバーが、「泣きやんだあとの様に……」と歌い出すと、客席から一斉に拍手が湧きおこる。日本のクラシックの演奏会では余り見かけない現象だが、この、「月夜を歩く」の曲に限って、拍手がおこる。

十六・七才の頃、私も月夜を歩くのが無性に好きだった。昭和20年に戦争が終って、その年の11月に、大阪の東住吉区に住み変えたが、翌年の春頃から、月の明るい夜、夕食後大和川の方へ向って、歩き出す。季節によって、霞がかかったり、蛙の合唱があったり、誘蛾灯が青白く光ったり、河内音頭が秋の夜風に流されて来たり、さまざまな光景が広がった。

昭和34年、関学グリーから二度の新曲を委嘱されたとき、「伊藤整先生が幼少の頃に過ごされた小樽のさまざまな姿」を描いてみようと、「雪明りの路」に取り組んだが、最初に「月夜を歩く」が目に止った。

「泣きやんだあとの様に／月が白い輪をもった夜更けて／私は……」のこの行は、実によくわかる。

「ひとり忍路の街を通りぬける／切通しをのぼりきれば／海の見えるさびれた家並がある」――これは、東住吉区とはちがう。すぐに、私の心の中の撮影機が回りはじめ、映像化がおこなわれた。「灰色の背」「塩風で白くなった板戸」「いたどりの多い忍路から出る坂路」が、感動を呼ぶ。そして、私がやったと同じように、伊藤先生も少年時代には、白い月を顔にあびて微笑えまれた。

この組曲を歌った人たちの何人かは、小樽へ旅行し、月夜にこの、「いたどりの多い坂道」を歩いている。地球上の、数え切れない人たちが、長い年月の間、月夜を歩いたとすれば、この行為は、どうも人間行動学の原点に近いところに位置するらしい。だから、ひとりでに、拍手が湧きおこるのだろう。

「月夜を歩く」に限らず、詩集「雪明りの路」に納められている詩群は、すべてが素朴で美しい。昭和35年夏、関学グリーの東京演奏会が共立講堂で催されたとき、関学グリーの招きに応じて伊藤先生が聴きにこられた。

当時29才の私は、ひどく緊張して、おそるおそる先生の横の席に座ったが、この組曲にじっと耳を傾けられ、合唱音楽のすばらしさを話された。カメラをとり出して、そっと、ステージのメンバーたちを写したり、自由詩でも、立派に歌曲になることの新発見を喜ばれたりする先生をみて、まさにこの心の中から、詩集「雪明りの路」が出来たのだと、私は感動的に納得した。

伊藤先生との出会いは、生涯、たったこの一度だけ。しかしその清廉な横顔は今でも私の脳裡に焼きつき、この組曲の一つ一つが流れるたびに、北国に生れ育った一人の大家の美しい魂を、しみじみと思い出す。